

# 新型コロナウイルスと私たちの生活

社会福祉子ども学科 高島恭子

## 1. はじめに

新型コロナウイルスは現在も多くの感染者と犠牲者を出し続けています。お見舞いとお悔みを申し上げます。ここでは、感染防止対策による高齢者や子どもの生活の面での変化を確認し、今後の取り組みを考えてみたいと思います。

## 2. 新型コロナウイルスの感染拡大による高齢者の生活の面での変化

2020年9月に行われた「厚生労働省 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査インターネット調査報告書（令和3年3月）」<sup>1)</sup>を見てみましょう。これによると、「①食事の量」「②睡眠時間」「③運動量」「④飲酒量」「⑤喫煙量」「⑥カフェインの量」「⑦ゲームをする時間」の変化について、新型コロナウイルス感染拡大前と比べ「減少した」人の割合が最も多かったのは「③運動量」でした（39.1%）（図1）。

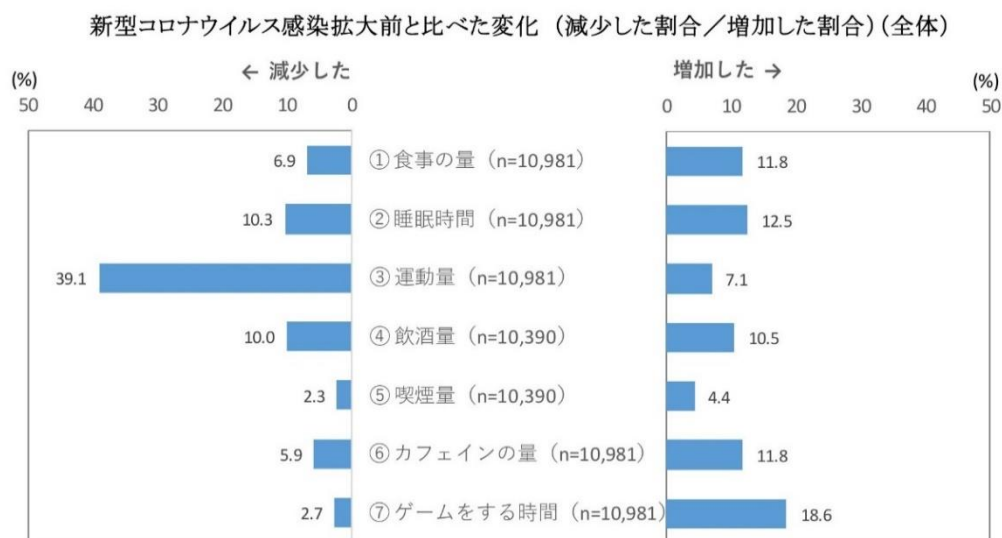


図1. 新型コロナウイルス感染拡大前と比べた変化（減少した割合／増加した割合）<sup>2)</sup>

高齢者では、「③運動量」が減少したとする人は60歳代で39.1%、70歳代で47.1%でした。困ったことやストレスに、「医療機関を受診しづらいなど医療サービスを受けづらくなったこと」を挙げた60歳女性は55.6%、70歳以上女性は54.2%でした。また、60歳女性の62.2%、70歳以上女性の63.5%は「家族・親戚・友人などに会えないこと」を挙げ、これは他の性年代よりも多いものでした。

年をとって体や心のはたらき、社会的なつながりが弱くなった状態をフレイルといい、その予防活動が進められています<sup>3)</sup>。このデータからは、新型コロナウイルス感染症に係わって高齢の方の活動性や社会的つながりが減少していることが伺えます。

### 3. 新型コロナウイルスの感染拡大による子どもの生活の面での変化

「マスクの着用」や「3密の回避」といった感染防止行動により、のびのびとした子ども期の遊びや節目ごとの行事が行えなくなってしまいました。国立成育医療研究センターが2020年11～12月に行った調査<sup>4)</sup>によると、「中等度以上のうつ症状がある子ども」が、小学4～6年生で15%、中学生で24%、高校生（相当）で30%とのことです。子どもたちは「勉強のこと（50%）」や「友達関係のこと（35%）」「自分の心・気持ち（35%）」で悩み（小学生以上：複数回答）（図2）、その約半数は誰かにそれを話すなどしてストレスを上手に減らすこともできていません。また保護者の29%に中等度以上のうつ症状があったとのことです。自由記述では「コロナを理由に何でもかんでも中止にしないでほしい（小学5年生）」「頑張り切れない（高校1年生15歳相当）」「子どもがコロナ自粛の関係で友達とあまり遊べなくなり、結果ゲームばかりやっている（中学1年生保護者）」などが見られます。日本の子ども・保護者の全体像を正確に表すものではないかもしれませんが、子どもも保護者も、頑張りを重ねた上での厳しい状況にあるといえそうです。

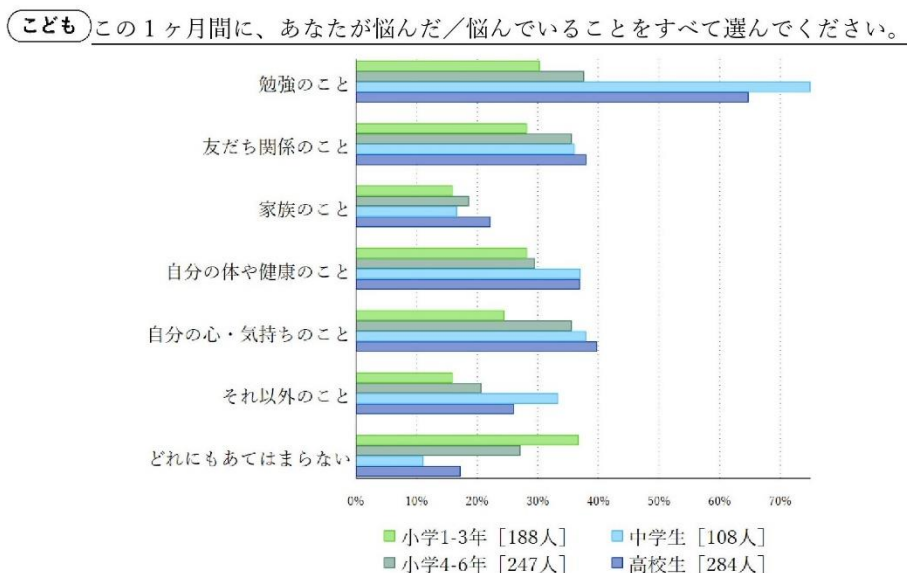


図2. こどもたちの悩み<sup>5)</sup>

経済活動停滞の影響は家庭状況を通して、子育てに影響を及ぼします。ひとり親家庭への影響についての2020年11月末の調査<sup>6)</sup>では「直近1ヶ月間に必要とする食料が買えない経験があった」と回答した「ひとり親世帯」は35.6%、「ひとり親世帯以外の世帯」は26.4%

でした。ただし、2017年度の「生活と支え合いに関する調査（特別集計）」で、「食料が買えない経験があったひとり親世帯」は34.9%でした。コロナ前も今も、学習のための用具や場所、インターネット環境だけではなく、食べることが脅かされている子どもたちがいることとなります。新型コロナウイルス感染拡大はこれまでもあった問題を広げ、人々の関心を起こし、顕在化させています。

児童虐待や家庭内での暴力については、家で過ごす時間が増えたことにより増えたのではないかと考えられています。しかし、令和2年の1～11月について月単位の件数を速報値として集計したもの<sup>7)</sup>では、感染防止対策が強くとられ始めた4月以降、対前年同月比は1～3月に比べてプラス幅が少ないもしくはマイナスとなりました。これは虐待する側が常に家にいるために相談に至らなかったためとも考えられます。

女性の自殺が増えたことも憂慮される変化の一つです。「コロナ禍における自殺の動向に関する分析について（中間報告）（概要）」<sup>8)</sup>では、2020年7月以後の女性の自殺者の増加傾向が指摘されています。ここでは「経済生活問題、勤務問題、DV被害や育児の悩み、介護疲れ、精神疾患等、様々な問題が潜んでいる。コロナ禍においてこれらの自殺の要因になりかねない問題が深刻化しており、女性の自殺者数の増加に影響を与えている可能性がある」と分析されています。自殺は増加率では女性が注目されますが、実数では男性が多いことも忘れてはなりません。

#### 4. 今後に向けて

新型コロナウイルスの感染拡大は個人の健康被害だけでなく、私たちの社会的つながりや活動の機会を奪い、これまでもあった社会の問題を広げ顕在化させています。一方、支援機関や支援のための制度についての広報も行われています。人と人とのリアルな対面での交流は制限されましたが、遠隔ツールは以前より日常的なものとなりました。せめて今あるものが活かされ、支援を必要としている人に自然な形で支援が届くことが重要です。

本当に困っているときに「辛い」と人に話したり、援助を求めたりするのは難しいことです。「なんだか元気ないけど、大丈夫？」そんな声掛けが支え合いの助けになります。「あなたの話を聞きたい」「あなたのことを心配している」「あなたの力になりたい」という気持ちを持ってしっかりお話を聴きましょう。「今はみんな辛いとき」「私にはそんなにたいへんなことには思えない、大丈夫よ」などの決めつけや批判、批評、安易な励ましは避け、誠実に、その人の今の気持ちを想像し、その感情を否定せずに受け止めましょう。

私たちは身近な人の小さな変化に意味を見出し、気遣い、声をかけることができます。困りごとがあれば、一緒に解決方法を考え、助けてくれる人や機関を探し教え合いましょう。科学的知識や技術に加え、社会的つながりの力でこの災禍を生き延びていきたいものです。



図4 つなガール・さきエール<sup>9)</sup>

## 参考・引用文献

- 1) 「厚生労働省 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査インターネット調査報告書（令和3年3月）」【最終公表】モニター調査報告書  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000769899.pdf>（令和3年5月23日閲覧）
  - 2) 前掲1) p.60.
  - 3) 厚生労働省ホームページ パンフレット「食べて元気にフレイル予防」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000620854.pdf>（令和3年5月23日閲覧）
  - 4) 国立成育医療研究センター 「コロナ×こどもアンケート 第4回調査報告書（2021年2月10日）」  
[https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomo/report/CxC4\\_finalrepo\\_20210210.pdf](https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC4_finalrepo_20210210.pdf)（令和3年5月23日閲覧）
  - 5) 前掲4) p.35.
  - 6) 厚生労働省ホームページ「コロナ禍の子育て支援策について（厚生労働省子ども家庭局R3.4.6）」スライド3  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000766177.pdf>（令和3年5月24日閲覧）
  - 7) 前掲6) スライド2
  - 8) 厚生労働省ホームページ「コロナ禍の雇用・女性支援プロジェクトチーム～もっとあなたを支えたい～(第2回) 会議資料」資料2「自殺対策・生活支援について」(スライド10)  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000755345.pdf>（令和3年5月23日閲覧）
  - 9) 厚生労働省ホームページ 「誰でもゲートキーパー手帳」  
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000168752.pdf>（令和3年5月23日閲覧）
- 
- ・ 埼玉県ホームページ 「新型コロナウイルス感染症とこころのケア」  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0606/krona.html>（令和3年5月23日閲覧）
  - ・ 埼玉県ホームページ 「身近にいる方々との接し方」  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/176709/mijikanahito2.pdf>（令和3年5月23日閲覧）